

# 夢追い人

福岡県工業技術センターインテリア研究所 主任技師 世利桂一さん

廃材から  
高付加価値製品の  
研究開発の夢を追い続ける



家具工場や製材所などから出る、廃材を何とか有効利用できないものか。インテリア研究所の世利桂一さんは、こうしたテーマで研究を進めてきた。そして、このたび研究所で開発した無公害型炭化炉を使い、廃材を木炭化した新製品を、ある企業と共同開発した。これは、河川護岸、あるいはフラワースポットなど用いられる木炭ブロックで、注目に値する製品だ。



今後の飛躍が大いに期待される。なぜそういえるのだろうか。建設行政の転換が関係しているからだ。建設省は、「自然を生かした川づくり」を今後促進していく。コンクリート護岸による治水一辺倒だったこれまで方針を変え、将来的に全国の河川や溪流の大半についてコンクリートの使用をやめる。やむを得ず使う場合も2001年をめどにコンクリートを使わない部分を増やす、「多自然型工法」を採用する。このため、土木ブロック業界では生き残りをかけて、新技術の開発に追われている。

また世利さんは、廃材から化学工業原料を作る研究も進めている。粉末にして廃材に化学処理を重ね、セルロース、グルコースを抽出する。それに希土類金属触媒を加えながら、医薬品などの化学工業原料となる「フルフラール誘導体」を作る。「フルフラール誘導体」は、高付加価値の物質。グラムあたり実に8,000円にもなる。完成すれば、廃材から作られるだけに、夢のような話だ。

「廃材を再利用する」といっても、付加価値のない製品では、商業ベースに乗ることはありません。高価なもの作ってはじめて、廃材を燃やすことに抵抗感をもつてもらえるところです。」

世利さんは、こう語る。「大川を何とかできないかと自分で見つけてテーマだったのですが、実のところ、この製品に関係している企業は、福岡市のある企業です。大川市内には豊富な廃材が存在しています。しかし、そのほとんどが毎日燃やされています。地利を生かし、市内企業からの廃材利用の提案を期待しています。」

「廃材を再利用する」といっても、付加価値のない製品では、商業ベースに乗ることはありません。高価なもの作ってはじめて、廃材を燃やすことに抵抗感をもつてもらえるところです。」

世利さんの2つの研究から、次のことがいえないだろうか。それは、廃材の分野にもアイディア次第で、多くのビジネスチャンスがあるということ。地利を生かしたベンチャー企業の誕生も決して夢でない。家具の需要は、景況の関係なく年々減少していくことは確実といわれている。それだけに、今進取の気性を持った、柔軟な姿勢が求められている。

世利さんもこう語る。「大川では研究所を活用される企業は限られています。『こうしたアイディアがあるのだが』とか『こうした新製品はどうだろうか』という風に積極的な話を持ちかけてほしいと思います。もつと地元利用されたいですから……。」

は、「自然を生かした川づくり」に調和する、需要が見込める製品といえる。

